

経済学博士小林昇君の『フリードリッヒ・リスト論考』および

『リスト・経済学の国民的体系』に対する授賞審査要旨

小林昇君は、十九世紀前半期に活躍したドイツの経済学者フリードリッヒ・リストに関する研究において、今日最も高い水準を代表する学者である。同君のリスト研究は、すでに三十年余にわたって続けられてきており、戦後には『フリードリッヒ・リストの生産力論』（一九四八年）、『フリードリッヒ・リスト研究』（一九五〇年）、『経済学史研究序説——スミスとリスト』（一九五七年）等の著作がとりまとめられているが、その後、一九六四年、同君はドイツに保存されている原資料や未発表資料についてリスト研究をさらに深める目的で、西南ドイツのバーデン・ヴュルツテンベルクを訪ね、ロイトリンゲンの「リスト文庫」を中心に刻苦精励して、リスト研究の未知の部分を追跡し、また、新資料や現地における新しい研究成果を駆使して、リストの伝記に関しての総点検をも行なっている。

小林君のリスト研究は、経済学説史上におけるリストを正しく位置づけるために、まずアダム・スミスについての自己の研究業績をふまえ、スミスとリストとの外面的な対立の底にひそむ内的なつながりをたどることによって、後進国ドイツにおけるリストの真実の姿を描き出そうとしているが、そればかりでなく、さらに広く経済学史および経済史の研究を足場にしながら、リスト研究を広汎に前進せしめている。すなわち、同君にはすでにイギリス重商主義について『重商主義の経済理論』（一九五二年）、『重商主義解体期の研究』（一九五五年）、『原始蓄積期の経済諸理論』（一九六五年）等の著作があるが、リスト経済学の意義の解明および評価は、イギリス重商主義のはらむ問題の

正確な理解と、それがドイツではどのような形で現われるか、またそれにリストがどのように関連するかの理解にかかっており、同君のリスト研究は、この点で自己の重商主義研究をまことによく生かしている。このように、アダム・スミスと重商主義とに関する研究を基盤にしつつ、ドイツにおける新しい研究成果や「リスト文庫」等における原資料の活用、また西ドイツのみならず東ドイツにおけるリスト研究者とも接触交流し、その結果生まれたものが、本書『フリードリッヒ・リスト論考』（一九六六年）および『リスト・経済学の国民的体系』（一九七〇年）の邦訳および評伝、註解である。そして後者すなわち、リストの主著 *Das nationale System der politischen Ökonomie*, Erster Band, 1841 の訳業（リスト生前の最終版「第三版、一八四四年」によって校訂した「リスト全集版」第六巻「一九三〇」年を底本とす）も、以上のようなリスト研究の上に築かれたリスト理解と豊富な資料的考証によってのみはじめて可能となったことである。

『フリードリッヒ・リスト論考』（一九六六年、未来社刊）は、六編の論文と二つの付録からなっているが、その大半は著者がドイツでの困難に耐えた文献渉猟と刻苦精励の結果である。第一論文の「フリードリッヒ・リストと経済学における歴史主義」は、本書の中核部分をなすもので、一三〇頁余にのぼり、本書全体の約三分の一を占める長篇の力作である。本論文は、経済学史の流れのなかにリストの経済学を置いて、その特質を描き出そうとするものであるが、とりわけ、次のような点が目立っている。すなわち、一面ではイギリス重商主義が、他面ではアダム・スミスが、経済学説ならびに経済政策の上で抱えていた問題を、十九世紀三十年代のドイツの情況のもとにあって、リストが理論の上でどう展開しようとしたかという問題意識を踏まえながら、晩年のリストが、理論、実践および思想の上

で示した微妙な変化を執拗に追究しており、同君のドイツにおける研鑽がみごとに生かされている。また第二論文「青年リストの伝記的諸問題」、第三論文「リスト文献とリスト文庫」は、何れも同君のドイツ滞在中における努力と結びついた克明な知識の集積を内包している。第四論文「歴史派経済学の父リスト」、第五論文「リストとスミス」および一八二七年に書かれたリストの著作 *Le Système Naturel d'Économie Politique* を取扱った第六論文「リスト研究における東独と日本——『自然的体系』の東独版によせて」の三篇は、ドイツのリスト研究者と著者との接触交流の土台をなし、またそのなかから生まれた諸研究である。

さらに『リスト・経済学の国民的体系』（一九七〇年、岩波書店刊）には、リストの主著を中心とする、理論、伝記ならびに研究史についての充実した解説、ならびに詳細な訳註と索引が付せられている。『フリードリッヒ・リスト論考』の第一論文について、著者自身は「ドイツでの勉強の成果がまだ残りなく示されていないことを遺憾としている」と述べているが、この点は右のリストの主著『経済学の国民的体系』の翻訳ならびにその解説によって補完されていると言える。事実この訳業は、以上のような長年にわたるリスト研究の蓄積と、アダム・スミスや重商主義に関する幅広い研究をふまえてはじめて可能となったものであり、またそれによって原典の意味内容が誤りなく日本語に移され得たのだと言わねばならない。その意味で、リストの主著の邦訳は、同君の多年にわたるリスト研究の一応のしめくくりをなすものと見ることができよう。

以上のごとく、本書の内容は、フリードリッヒ・リストに関する緻密な考証と広い思想史のかつ経済史的視野の上に立つ経済学説史的研究である。とくに同君が、従来内外ともにかく見のがされやすかったリストの農地制度に関

すの論考 Die Ackerverfassung, die Zwergwirtschaft und die Auswanderung, 1842 を重要視し、つとにその邦訳『農地制度・零細経営および国外移住』（一九四九年）を公にし、さらに本書で、この問題を基軸として、晩年のリストに関する研究を大きく推しすすめていることは、それ自体が独自の業績であるばかりでなく、今後のリスト研究に対して重要な問題視点を提供することになったと言つて差支えないだろう。しかも本書は、このような意味でのリスト研究として群を抜いているばかりでなく、またとりわけ、戦後のわが国では、ほとんど独力でこの領域の研究を背負ってきたといつてもよい著者が、今後のわが国におけるリスト研究者に新しい途を開拓している点でも評価されなければならない。

以上のように、本書、すなわち『フリードリッヒ・リスト論考』と『リスト・経済学の国民的体系』とは一体として取扱われるべき業績であり、三十年余にわたる同君のリスト研究を総括したものととして高く評価することができ